

## イメージによるワークがもたらす個人内の変容 —保育に携わる者として不可欠な感受性の会得の試み—

愛知教育大学 林 牧子

### 1 問題

幼いころ夢中になって泥遊びに興じたり、砂と水を混ぜて遊んだりした経験のある者は多いだろう。泥は独特のぬめりが特徴である。肌にまとわりつくような感覚は同時に自分自身を包み込む感覚であるとも言える。肌に触れるものとして柔らかいものを好むということは、我々人間のみならず多くの動物に共通することである。また、「皮膚は露出した脳である」と言われるが、乳児が肌感覚により様々なことを知り、脳を発達させているという事実も明らかになっている。我々大人も、肌触りの良いタオルで身をくるむと何とも言えない心地よい感覚を味わうことがあるのではないだろうか。

肌で直接感じた快刺激は脊髄を通り、脳の視床下部に影響を与える。この部位は非常に原始的な本能欲求の中樞であるため、その刺激は理知的に認識され得るものとは区別すべき「快」そのものとして受け取られる。従って理性のほぼ及ばない原始的感觉を呼び覚まし、ひたすら快刺激を求めるべく泥遊びなどに熱中するのである。「快刺激を伴っての熱中」には理性（意識）が介在しづらいため、無意識の衝動性や攻撃性、幼児性などが表出することが度々ある。これは、原始的な肌感覚が無意識に働きかけ、理性の力を弱めた結果、意識レベルである自我（エゴ）が無意識レベルである超自我（スーパーエゴ）やエスを制御しきれなくなったためだと考えられる。つまり、「快刺激を伴っての熱中」によって日常的には意識することのできない自己を発見し、同時に知られざる自己との対話を果たす働きを持つものとも言えるのではないだろうか。

この経験は対人援助職であり教育者であり、また寄り添う者としての保育者にとって大変重要なものと考えられる。保育者は単に計画に沿って保育を行うだけであったり、無意識裏に子どもを操ったりする存在であってはならない。子どもの思いや感情の流れに自然に寄り添い、共有する者としての存在であることが望まれる。そのため、一心不乱に何かに熱中する楽しさ、あるいはそれに伴うネガティブな感情を実感として持つ必要がある。さらに、他者、特に子どもの思いを感じ取るためには何より自己の思いに気づくことが重要である。保育者自身の「自己の思い」とは、自分が保育の中で何に価値を置き、何を重視しているのか、また自分はどのように他者を捉える「癖」があるのかなどといったことについてはもちろんのことだが、これらのような意識的、理知的な側面のみにとどまらず、日常的には意識し得なかった「思わぬ自分」に気づくことでより一層自己理解が深まるものと思われる。また、保育者は常に人間関係の中で生きる存在でもある。それと同時に、子どもや保護者の人間関係を支える必要もある。そのためには場数を踏み、同時に様々な具体的対応方法について学ぶことが重要であろう。しかし、最も必要とされることは、保育者自らが子どもが体験している人間関係と類似した関係性を実感することである。子どもは遊びの中から多くを学ぶ。したがって、大人も内なる幼児性の表出が保障されている環境の中で、他者に受容されることの喜びや否定されることの悲しみを感じ取る経験を行うことが不可欠ではないだろうか。

そこで本研究では、幼児期の感覚を想起しつつ、自他の感情が交錯する状況を追体験する方法としてコラージュとフィンガーペインティングの2種類のイメージワークを行う。特にフィンガーペイン

ティングはその名の通り、指や手のひらに直接絵の具をつけて表現するものである。絵の具を筆ではなく自分の手に取るという行為や、絵の具の持つ柔らかく、ぬめりのある質感に伴う心地よい皮膚感覚により我々大人は退行に向かいやすい。そのため、フィンガーペインティングは比較的容易に自己の幼児性を表出できる。また、筆を使わないので、絵の得手不得手をあまり意識することなく取り組むことができるという点からも、遊びの中でおこる人間関係を追体験する方法として特に適切であると考えられる。

## 2 目的

本研究においては、自己の解放と対話の手段としてまず個人的にコラージュを行う。その後グループでのコラージュを行い、自己表現のウォーミングアップとする。その後に個人的なフィンガーペインティングを行う。さらにその後グループでのフィンガーペインティングを行い、「自己と他者の思いの融合・ずれ」を主観的に体感した後、各々が描画表現をする中で何を思い、感じ、考えたのかということについて言語化することにより客観視し、自分の思い・他者の思いに向き合うきっかけとすることを第一の目的とする。

また、グループでフィンガーペインティングを行うことで幼児期の遊びの追体験をすることを第二の目的とする。指絵の具は適度なぬめりがあるため、指先や手でこねることでしばしば退行へと向かう。そして自らの幼児性を表出しやすくなる状況において、仲間同士で孤独・充実・葛藤・喜び・悲しみなど相反する感情が交錯するであろうグループワークを行うことが、幼児期の遊びを追体験することになり得ると考える。追体験をする中で、理性や社会的体裁にとらわれ過ぎることのない、いわば「素直な」感情を味わえることが望ましいと考える。

## 3 方法

### 対象者

愛知県内の大学に在学中の、幼児教育を専攻とする3年生19名（女子）。1年の時からほぼ共に授業などを受けているため、親密度はかなり高く、少なくとも「顔見知り程度」という関係性は存在しない集団である。

### 期間

2007年1月～3月、週に一回約100分かけて計6回実施。7回目に記述による振り返りを行った。

### ワークの詳細

1970年代から行われている「ファンタジーグループ」(樋口・岡田2000)を参照した。ファンタジーグループとは小集団が無言のうちにフィンガーペインティングを行い、後にグループで造り上げた作品を切って新たなものを創り出し、そして粘土遊びをするという3つのワークで構成される。実際のファンタジーグループでは宿泊を伴い、日常生活から離れた自然豊かな環境で行われる。また、それぞれのグループが滞りなくワークを行えるよう、「世話人」という大切な存在がいる。世話人はワークに直接的にタッチすることはないが、グループで起こる出来事や出現するイメージを見守り、広からせる役割を持つ。しかし同様の環境を準備することは困難であるため、日ごろ慣れ親しんだ部屋(比較的自然に恵まれ、窓外には木々の緑が豊かである)でワークを行い、また、世話人はつけずに筆者が必要最低限の動きをできる限りの範囲で行った。作業中に個人的な価値観や評価を表現することはないよう努めた。なお、「幼児期の遊びを追体験する」ということを本研究におけるワークの目的の一つとしてあげているため、学生に対して実際のファンタジーグループのように「無言で行う」とい

うことは教示しなかった。

また、フィンガーペインティングを行う前段階として、コラージュを行った。これは、自己表現によるワークへの取り掛かりとして、比較的抵抗なく行えるものという意味合いで行った。コラージュは現実に存在する写真などを切り貼りするため、それほどの準備も必要なく、学生にとってフィンガーペインティングよりもやり易いのではないかと推測したためである。なお、本研究においては粘土遊びは行わなかった。本来のファンタジーグループではプログラムされているが、その意義は「個人的な体験を強く出せるもの」としてである。本研究ではその意味合いを持つものとして、個人コラージュと個人フィンガーペインティングを行い、粘土遊びの代替的なものとした。

#### 手順

＜1週目：実践1＞ 個人でコラージュを実施。各自はさみとのり、好きな雑誌を2、3冊持参し、用意されたA4の用紙にコラージュを行った。作成枚数に制限は設けず、また、筆者が用意した多くの雑誌を部屋の前に置き、共通に使用することとした。なお、枚数制限は設けなかったものの、作成枚数は全員1枚であった。

＜2週目：実践2＞ グループでコラージュを実施。1グループの構成人数は基本的に5人で、19名在籍しているため4グループ（5名×3グループ、4名×1グループ）の構成となった。なお5人と設定したのは、四角い紙を使用する際に4人だと各自のテリトリーが固定化しやすいため、それを防ぐ目的がある。グループ構成に関しては筆者からの指示はあえて行わなかったため、日ごろ行動を共にしているもの同士の組み合わせが4組中3組であった。1週目に用いた雑誌を継続して使用し、用意されたA3の用紙にコラージュを行った。作成途中の会話は自由であり、また作成枚数に制限は設けなかったが、全グループ作成枚数は1枚であった。

＜3週目：実践3＞ コラージュの鑑賞を実施した。各自で作成したコラージュを筆者が適当な順番で全員に見せ、誰のものかを想像させてから本人に渡し、作成中の気持ちや感じたことがら、作品にこめた思い、今改めて見て感じることなど、自由に語る方法で鑑賞を行った。一人当たりの時間は約3分とした。

＜4週目：実践4＞ 個人でフィンガーペインティングを実施。指絵の具（6色入り3セット）とパレット（30枚）、絵の具をとりわける紙皿（20皿）とスプーン（20本）とティッシュペーパー、ぞうきん、机に敷く新聞紙、A3の用紙を用意し、「好きなように、思いのままに」とだけ伝え、ワーク中の会話や移動なども自由に行えるようにした。また、作成枚数に制限は設けなかった。次々と作品を作る学生もいれば、1、2枚で終了とする学生もいた。

＜5週目：実践5＞ グループでフィンガーペインティングを実施。フィンガーペインティングのグループは筆者が意図的に構成したものであり、「よく知っているけれど、日常の行動を共にするということはない」という関係性の者と「いつも共に行動する」という関係性の者を混合した。1グループの構成人数は4～5人であり、構成人数の理由はグループコラージュと同様である。指絵の具等の材料は4週目と同様だが、用紙は90cm×120cmの画用紙を用いた。また、作成枚数に制限は設けなかった。4グループ中3グループが2枚作品を作り上げた。

＜6週目：実践6＞ グループで作成したフィンガーペインティングのカッティング（切り絵）を実施。各自はさみとのりを持参し、5週目に仕上げた作品にはさみを入れ、新たな用紙に貼るというワークを行った。その際に、必ずしもはさみを使用する必要は無いということ、「好きなように、思いのままに」作成して良いことを教示した。用紙は5週目と同じ材質の画用紙で、90cm×90cmのものを1枚用意した。なお、作成途中でステープルを使用したいという者がいたため、3本ほど

用意して自由に使えるようにした。カッティングは作成数を1つに限定し、各グループとも1作品を作り上げた。また、全グループとも立体作品となった。

<7週目:実践7> 全ワークの振り返りを実施。「個人コラージュ・グループコラージュ・個人フィンガーペインティング・グループフィンガーペインティング・カッティングのワークを通して自分の中におこった心の動きをよく思い出して書いてください」という内容で自由に記述することを指示した。時間は60分程度設けたが、書ききれずに持ち帰って後日提出する者もいた。なお、記述の方法はあくまでも自由だが、なるべくそれぞれのワークについて分類して書くようにということ、さらに、偽らない自分の気持ちを素直に、正直に書くようにということを教示した。

#### 4 事例と自由記述の分析

##### ワークに伴う様子の比較と概観

実践7での振り返りを元に、それぞれのワークについての印象をポジティブ(楽しい・嬉しいなど)、ネガティブ(嫌・やめたい・抵抗感など)、混合に分類した(表1)。なお、「楽しかった」のように明確な肯定的印象を記述している者のみをポジティブ反応に分類し、その他は全てネガティブに分類した。また、混合とは両方の印象が明確に記述されているものである。

##### <実践1:個人コラージュ>

意気揚々と始め、積極的に多くの雑誌を切ったり躊躇なく用紙に張り付けたりする者がいる一方で、なかなか始められずに雑誌をいつまでもめくり続けたり、困惑した様子で機械的に切り始める者もいた。個人コラージュに対してプラスの印象を持っている者は、次々と湧き出るイメージを自由に表現できることに対しての喜びを感じていると思われる(表1参照)。コラージュはもともと存在する写真を使って自由に表現するという点から、自分のイメージするものと合致した写真を見つけることができれば比較的容易に表現が可能となる。また、写真自体が抽象的なものであったり、すでに「作品」として芸術性を備えたりしているものも多いこと、さらにイレギュラーな組み合わせも容易であることから、自己の能力を超えた表現が出現しやすいこともその「楽しさ」の一因であろう。また、個人的に行うものは誰にも侵食されずに自己イメージを表すことができるので、安全が保障されていることが安心感を伴ってコラージュを楽しむ余裕につながるものと言える。

一方、マイナスの印象を持っている者は、コラージュそのものに不安や警戒心を持ったり、体裁や評価を意識したために自由度を失ったりした結果、ネガティブな印象を持ったものと思われる。個人的にコラージュを行うということは、自分の表現が明確に紙面に現れるということである。限られた時間で、限られた材料から表現を起こさなくてはならないため、必然的に手直しが難しくなる。このような条件も重なり、完成したコラージュに対しても「納得がいかない」「自分ってつまらない人間だと思った」という感想を持つ者もいた(表1参照)。

##### <実践2:グループコラージュ>

グループコラージュは普段行動を共にしている者同士を中心にグループを構成したのだが、全4グループの中で構成メンバー全員がポジティブな印象を持っているのは1グループのみであった。このグループは実に自由に、また楽しそうに行っており、人の上に自分の切り抜きを貼る時にも明確な「ためらい」や「遠慮」「お伺い」などが見られなかった。メンバーがいつも一緒にいるということから全体的に気楽さと気の置けなさから、遠慮なく開放的な気持ちでワークに臨めると予測していたが、実際は相手の出方を伺ったり、評価を気にしたり、イメージどおりにいかないことに不満を覚えたりするなど、グループの持つ精神的凝集性の少なさが表出したと思われる。中でも、特に完成したもの

表1 振り返り作業を元とした各ワークにおける印象 ※カッティングは2名欠席のため、17名で行った

印象 ワーク	ポジティブ	ネガティブ	混合
個人 コラージュ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分で感じたまま考えたままを好きなように貼ることができ、本当に夢のように楽しかった</li> <li>・(個人) コラージュはすごく楽しくて、とにかく楽しくて</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・朝から憂鬱で(中略)教室に入ってからほとんど誰とも会話せず、(中略)すごく冷めた状態だと感じていた</li> <li>・個性や内面を表現することに戸惑いがあった</li> <li>・形あるものから自分の作品を作ることに抵抗があった</li> <li>・よく見せようと意識してしまい難しく感じた</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・初めは戸惑いがあったけれど、やり始めると楽しくできた</li> </ul>
人数(%)	10 (50)	7 (54)	2 (15)
グル ー プ コラージュ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・心ゆくまでやりきった。作品を見ると元気が出る</li> <li>・気を遣わず自由に進められた</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・見られていると思い、集中できなかった</li> <li>・自分の対人関係を表しているみたいでとても嫌だった</li> <li>・踏み込まれることに拒否感があった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・初めは嫌だったが、自分のイメージを重ねてくれてとても嬉しかった</li> </ul>
人数(%)	10 (59)	8 (47)	1 (8)
個人 フィンガー	<ul style="list-style-type: none"> <li>・完全に自分の世界に入れて楽しかったし、気分も安定していた</li> <li>・昔から泥遊びとかが好きで楽しくできた</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・なんだかやりきった感もなく集中できなかった</li> <li>・汚れたくなくて、とにかくやりたくなかった</li> <li>・絵が苦手だし、何も思い浮かばなくて困った</li> <li>・気持ちが落ち込んでいたので抵抗感があった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・とても楽しかったが、友達のような暗い色が出せなくて嫌になった</li> </ul>
人数(%)	12 (63)	5 (38)	2 (15)
グル ー プ フィンガー	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遠慮のいらない感じでのびのびと色をつけていけた</li> <li>・友達の刺激を受けつつ自己表現もできた</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・窮屈でやりたいと思えず、早い段階でやめてしまった</li> <li>・他の子とのイメージの違いが嫌だった。苦痛だった</li> <li>・早く終われとずっと思っていた</li> <li>・テリトリーを感じてしまった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・抵抗感があったが自分の場所を見つけた後はすごく楽しかった</li> </ul>
人数(%)	8 (47)	10 (59)	1 (8)
カッ ティ ン グ ※	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自由にしているけれど一体感があるように感じた</li> <li>・生き生きできた。やっている時、楽しくて元気だった</li> <li>・作品が一体になり嬉しかった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分だけの作品になり、孤独と寂しさを感じた</li> <li>・思い出したくないくらい苦しかった。何をやっても嫌な感じにしかならないし、投げやりになってしまった</li> </ul>	
人数(%)	15 (88)	2 (12)	0 (0)

が4分割されているグループがあり、このグループに所属していた者は4人中3人がネガティブな感想を述べている(表1参照)。なお、残りの1人は最も広範囲に貼っており、個人コラージュに対して抱いていたネガティブな印象が、グループコラージュに対してはポジティブなものへ変化していた。

他の2グループは全体的に分散した貼り方ではあるが、人の貼ったものを生かした貼り方であったり、上に重ねることが少なかったりするものであった。この状態を「個人コラージュの延長」と捉える者もあり、グループならではの表現と言うよりも相互に侵食し過ぎず、生かしあうための方法としての貼り方と捉えていた。このグループに所属していた者は、「自分が貼ったものの上に重ねられているのに気づき、ちょっと悲しくなった。それと同時に自分が他の子が貼ったところに何気なく貼ってしまったことが、その子にとってはショックなことだったのかもしれないと思うようになり、他の子と絡みづらくなった」と述べている。

<実践4:個人フィンガーペインティング>



フィンガーペインティングにおいてもコラージュと類似した傾向が観察された。「楽しそう、早くやりたい」と口にし、際限ないかのごとく指絵の具を使用する者がいる一方で、あまり表情を変えず思慮にふける様子で紙を見つめたり、指先に少し絵の具をつけ、小さな具体物を二つ三つ描いたりするだけの者もいた。とはいえ、個人コラージュに比べてポジティブなイメージを持つ者が50%から63%に増加している（表1）。フィンガーペインティングは各自のやりたいようにやれば良いということ、色数が限定されているので表現の幅に限界があり、安心感に繋がるということ、指で描くため技術の差をあまり気にしなくても良いということが緊張感を減少させたのであろう。

なお、ネガティブな印象を持った者の一人が、「いつもならわくわくするはずなのに（中略）始められなかった」「いつもなら赤やピンクや黄色を使うはずなのに、あの日は青色がすごく使いたかった」「そのときの感情がそのときのワークにすごく関係していたと思う」と振り返りをしていた。この学生は表現全般に対して基本的に苦手意識は無く、表記の通り普段なら生き生きと行っていたと想像できる。このことから、このようなワークが自己対峙の場となると同時に内省と客観視を促す契機となることが示唆される。

#### ＜実践5：グループフィンガーペインティング＞

1枚目は立ち、2枚目は座って製作するプロセスのグループが3グループであった。1グループは全員座ったまま、目の前の白い部分が担当箇所であるかのように描き始めた。このグループは最後までそれぞれの絵が交じり合うことがなく、大きな紙にはっきりと6つの絵が描かれたという印象のものになった。そして、このグループのみが作品数1枚であった。構成メンバーは5人であるが、全員明確にネガティブな印象を持っていた。「追い詰められたような気持ちになった」「早く終われとずっと思っていた」のように、マイナスのイメージを持ちながらワークを行っていたようである。

一方、このグループ以外はメンバーの表現が重なり合い、完成した描画のみを見るとのびのびと描いているという印象であった。しかし実際の心情と外からの印象に違いがあると同時に、同じグループ内においても感じ方に違いがあることが振り返りから明らかになった。これらのグループでは、「5人のバランスが取れていて（中略）作っていて楽しかった」と記述する者もいれば、「ぐちゃぐちゃは嫌だと思った」と振り返る者もいた。また、他のグループでも「（思いのままに作ろうとしている友達を見て）やりたいようにやろう、と積極的な思いだった」という記述がある中で、「あのワークは嫌だった」と記述する者もいた。この「嫌だった」と書いた学生は、前述の学生の積極的な思いを引き出すきっかけとなった学生であった。この学生は、続けて「どうにか○○ちゃん（前述の学生）が爆発できるように！とはりきりすぎて、出してはいけないところまですごい速さで出し尽くしてしまった気がする」と内省している。さらに、このグループの別の学生は「すごい抵抗感で、集中できず他のグループを見に行ったり手で色を混ぜたりしていた」と書いており、続けて「2枚目で隅っこを陣取って（中略）すごく集中できた。人が入ってくるのが嫌で、自分の場所にしたかった」と述べている。

これらの記述から、自由な表現をする中で一つのものをつくり上げるということの喜びと、自分の領域を守りたいという思いが交錯する中でのワークとなったことが考えられる。この感覚は、本研究の目的の一つとして挙げた「幼児期の遊びの追体験」に通じるものである。ワーク中は自由に動き回ることが出来たため、多くの学生が他のグループの作品を見ていた。そして思い思いに「楽しそう」「元気になる感じがする」「芸術作品みたい」と感想を述べていた。しかし、そのように評された作品を描いた本人は正反対の感覚を持っていることもあった。つまり、「楽しく遊んでいるね」と言われたとしても本人はそう感じていないこともあるということ、そして仲間で共同作業をしても自分の

居場所を作りたいと思うことがあるということに気づくことが保育者として必要であろう。振り返りの記述でそこまで言及している学生は見られなかったが、この点における意識化が必要だと思われる。

#### <実践6：カッティング>

カッティングは全ワークの中で最もポジティブ反応が多く、ネガティブ反応が少ないという特徴が見られた（表1、図1）。グループフィンガーにおいてほぼ交わらなかったグループのメンバーは、欠席者を除いて全員「絵が誰のものでもなくなって一体となった感じがすごく嬉しかった」「違和感が合った自分の絵をうまく生かしてくれているのが嬉しかった」「グループフィンガーと同じメンバーだったが、やりにくいと思わなかったのは交わりながら作ることで気持ちが寄っていったからだと思う」などのようにポジティブな印象を持っていた。また、「フィンガーペインティングは『出す』作業、カッティングは『破壊と整理と浄化』」と述べた学生もいたように、カッティングはフィンガーで現れた見たくない自分（自己表現）を消し、再構築することで新たな自分を見ることが出来るという作用があるが、特に自分の表現を残した上で新たな表現を起こすことに意義があるということが示唆された。

なお、参加人数17名中、グループフィンガーの印象からカッティングの印象がマイナスに変化した者は1名、グループフィンガーもカッティングも共にマイナスの印象を持った者は1名のみであった。前者は「座った位置が悪く、自分だけの作品になり、孤独と寂しさを感じた。何とか関わろうとしたが、皆それぞれ夢中でこちらへの関心が全く無かったので一人で頑張ってしまった」と述べている。また、後者は「思い出したくないくらい苦しかった。何をやっても嫌な感じにしかならないし、投げやりになってしまった」と述べている。この学生は絵画表現に自信を持っており、描くことや創ることが大変好きであるが、グループフィンガーの際にも「あのワークは嫌だった（前述、実践5：グループフィンガーペインティング参照）」と述べているように多大なストレスを感じていたようである。これは、指絵の具の感触に遊ぶということに留まらず、自分の表現をしたい、視覚的に満足のいくものを創りたいという欲求の現れとも考えられる。この学生は後日個人的にフィンガーペインティングをやりたいと申し出てきており、長時間行うことで「やっとすっきりした」と述べていた。

#### 各ワークに対するポジティブ・ネガティブ印象の示す割合

振り返りの記述からは、同じ者が感じるコラージュへの印象とフィンガーペインティングへの印象に相互に関係性があるとは言えず、コラージュには抵抗を感じたが、フィンガーペインティングには抵抗無く積極的に関わることができたという者や、その逆の感覚を持った者も見受けられた。この点からしても、コラージュとフィンガーペインティングの両方を行うことは必要であると思われる。一方だけでは欲求不満に陥ったり、心理的に消化不良のままワークを終えたりする危険性が想像できるからである。また、コラージュでは見受けられなかった、疲れきった様子（表情、態度ともに）がフィンガーペインティングには見られたのだが、このことに関して9名（47%）が記述していた。その理由としては「（グループフィンガーにおいて）気を遣ってやっていたので疲れた」「いい意味で疲れたー！という気持ちだった」「終わった後すごく疲れた。こんなにパワーがいるものなんだとびっくりした」など、疲労感の要因は複数あることが分かった。なお、「疲れた」という記述が見られたのはフィンガーペインティングにおいてのみであった。このように、各々が持つそれぞれのワークについての印象やワークを行った時の感情、グループの人間関係などに影響を受けることでワークについての個人的な印象が変化するものと思われる。また、例えば「疲れた」という印象にしても、その背景まで迫らなければどのような印象を伴った疲労であるのかがあいまいになってしまうため、個人的

な振り返り作業が必要であることが示唆された。

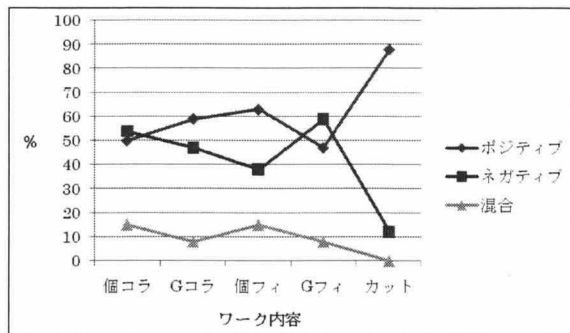


図1 各ワークに対するそれぞれの印象の割合

「切」という行為自体はコラージュと変わらないにも関わらず、これほどポジティブ反応が増加したということは、フィンガーペインティングの持つ“吐き出させる力”の大きさによるものであろう。フィンガーペインティングによって期せずして無自覚の自分が出した時、そこに目を伏せたくなることも多い。しかしそのような部分も他者にとっては単なる描画に過ぎないこともあり、その他者が特別な意味を付与することなく切る（破壊する）ことで安心感を覚えるのである。また、好んで描いたものが切られることに切なさを感じたとしても、別の表現形態を取ることで自己表現が再生する。このことが自己存在の認めのように喜びにつながると思われる。三つ目は同じグループワークでもコラージュとフィンガーペインティングでの印象に差があるという点である。グループフィンガーペインティングの場合、個人が好む色味や雰囲気などに齟齬が生じやすく、その点でストレスを感じる人が多い。それに対してコラージュは比較的精神的凝集性の高いグループで行ったということもあるが、既存のものからの構築であるため“私の表現”という意識が薄れやすく、また冗談めいた活字や写真などの力を借りて雰囲気を作ることもできる。この違いが印象の差を生み出したと考えられる。四つ目は同じフィンガーペインティングでも個人とグループではその印象に差があるという点である。自分の世界が保障されている個人ワークと比較すると、グループワークの「窮屈さ」はネガティブな印象を生み出す原因になったと思われる。

## 5 まとめ

2種類のイメージによるワークを通して起こった感情に焦点を当てることにより、イメージに遊ぶことの楽しさ、囲い込むことの安心感、仲間とイメージが違った時の違和感、自他の感情への気づきなど様々な心の動きを観察することができた。今後はさらに人数を増やすことで、個人の質的なデータの充実を図ると共に客観的なデータとして示すことを課題とする。

## 参考文献

- 1 樋口和彦・岡田康伸編集 2007『イメージによるグループワークの実際』 至文堂
- 2 樋口和彦・岡田康伸編 2000『ファンタジーグループ入門』 創元社
- 3 ルース・フェブン・ショウ著 深田尚彦訳 1982『フィンガーペインティング—子どもの自己表現のための完璧な技法』 黎明書房
- 4 岡田敦 2006「表現療法としてのフィンガーペインティング—精神科臨床における適応とその実際」 椋山女学園大学研究論集 37 人文科篇
- 5 高江洲義英・入江茂編 2004『コラージュ療法・造形療法』 岩崎学術出版社